様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２４６８

研究課題名（和文）英国スチュアート朝の演劇舞台　―その衣装・演出と商業劇団の係わり―

研究課題名（英文）Performances and Costumes of the Early Stuart Playing Company

研究代表者
小林　酉子（Kobayashi, Yuko）

東京理科大学・理工学部教養・教授

研究者番号：６０２７７２８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英国スチュアート朝(1603-1649)における A.王室演劇舞台、B.民間演劇舞台の演出の実態を再現し、A.B 各々の具体的な実相と商業劇団の係わりを明らかにすることを目的とした。
17世紀前半は、宮廷マスク(仮装仮面劇)、民間の室内・屋外劇場、市内の野外式典がそれぞれに発展を遂げ、職業俳優はそれらのすべてに深く関わっていた。本研究では、商業劇団の活動を通して、これまで不明な部分が多かった舞台衣装の調達方法、王室・民間の舞台演出を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヨーロッパ中近世の舞台では視覚効果が重視され、衣装はとりわけ重要な要素で、劇団の財産でもあった。舞台衣装は、劇団経営、集客、舞台演出に占める役割が大きかったにも拘わらず、これまで研究対象としては殆ど取り上げられてこなかった。本研究は舞台衣装を通して、王室と民間での舞台演出、双方の劇場舞台をつなぐ劇団の活動実態を解明しようとした。商業劇場における新たな道化の出現、特殊衣装の具体像、室内劇場への宮廷マスク演出・衣装の導入など、本研究で明らかになった点は多い。

研究成果の概要（英文）：The research covers the early Stuart period when each of the royal family members patronized a playing company. These companies were more often summoned to court to perform dramas. And the number of court masks increased, in which royals and aristocrats took roles as well as professional actors. The situation brought changes in the repertory and performances of the company.
The research revealed the way how masking costumes in the court revel were prepared, the appearance of a new type of clown on stage who was a fashionable upstart in the city, and also specific costumes of fantastical characters.

研究分野：英国ルネサンス演劇

キーワード：英国ルネサンス演劇　舞台衣装　宮廷マスク　スチュアート朝　ジェイムズ朝　室内劇場

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英国ルネサンス演劇の最盛期は、エリザベス朝というよりジェイムズ朝(1603-25)にあったといってよい。シェイクスピアの四大悲劇はエリザベス晩年からジェイムズ時代の作品であり、ベン・ジョンソンの活躍の場もジェイムズ王宮廷とその時代の民間劇場にあった。清教徒革命のさなか、1642 年にロンドンの劇場がすべて閉鎖されるまで、30 年にも満たない期間に多くの傑作が生まれた。しかし当時の俳優がどのような衣装で舞台に立っていたのか、衣装調達が劇団運営にどう係わっていたのかなど解明されていない点は多い。

本研究開始までには、チューダー朝初期からエリザベス朝を対象に、衣装調達と舞台演出、商業劇団の成長が密接に結びつき、ルネサンス演劇の興隆を導いたことを明らかにした。本研究はその後の時代を扱い、スチュアート朝に急増する王室饗宴と、これに関与し、王室メンバーのお抱えとなった商業劇団が民間劇場でどのような劇をどのような衣装・演出で演じていたのか、その実態と劇場閉鎖に至る経緯・関連性を歴史的に明らかにすることを目指した。

欧米では 2000 年代から、16､17 世紀英国の物質文化を基に、当時のシェイクスピア劇衣装や劇団経営のあり方を考察する研究が進んだが、国内では、戯曲本文や作劇の社会的・政治的背景に焦点を当てた文学的､社会史的研究が中心を占め､舞台衣装についての研究は殆ど見られない。本研究は舞台衣装を通して、王室と民間の舞台演出、双方の劇場舞台をつなぐ劇団の活動を歴史的に解明しようとするもので、国内・国外ともで研究されてこなかった分野である。

2．研究の目的

本研究は、英国スチュアート朝(1603-1649)のルネサンス演劇盛期から劇場閉鎖(1642 年)までを対象とし、舞台衣装を中心に、A.王室演劇舞台、B.民間演劇舞台の演出の実態を再現し、A.B 各々の具体的な実相と商業劇団の係わりを明らかにすることを目的とした。

17 世紀前半、宮廷ではマスク(仮装仮面劇)と演劇公演の回数が増加した。また民間の室内劇場では劇中劇を組み入れた芝居が増え、屋外劇場の上演劇との間に、演目の相違が目立つようになった。職業俳優はそれらのすべてに深く関わっていたが､その具体的な実態には不明な点が多い。ルネサンス演劇盛期から劇場閉鎖まで、王室・民間演劇を取り巻く状況はどのように変化していったのか。商業劇団の活動を通して、舞台衣装の調達と劇団経営、王室・民間の舞台演出を明らかにし、ルネサンス演劇が終焉に至る過程を検証することが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は 4 年間の文献調査、実見調査により、A.王室演劇舞台、B.民間演劇舞台 各々の [1]衣装・演出、[2]劇団の係わりと経営状況・衣装調達方法と経費を分析しながら、王室・民間舞台での演劇の具体像と劇団活動を解明する方法をとった。研究には戯曲・マスク作品テクスト、王室会計簿、王侯入市式・巡幸記録, 市長就任式・職業組合祝典記録などの文献資料、宮廷マスクデザイン等の画像資料を用いるほか、王宮や貴族城館での実見調査を行った。

A.王室演劇舞台　①宮廷マスク：ジェイムズ朝になると王室は急速に演劇への傾倒を強めていき、王妃や王子、貴族が演者となる宮廷マスクの上演回数が増加した。舞台装置、背景、衣装演出を担った宮廷建築家イニーゴ・ジョーンズによるデザイン画、王室会計簿から衣装･舞台演出を再現し、経費を検証した。②宮廷での上演劇：王室メンバーの各々はパトロンとして劇団を抱え、宮廷での劇上演も盛んになった。王室のマスク嗜好を反映し、劇中劇を組み込んだ芝居が生まれたのもこの時期である。マスク的な劇中劇には、妖精、女神、魔女等が現れる。民間劇場でも上演されたが、これらの人物がどのような姿で舞台に立っていたのか、戯曲本文の他、マスクデザイン画、宮廷饗宴局会計簿、貴族邸での饗応記録等をもとに、衣装を再現し、劇演出の実態解明を目指した。

B.民間演劇舞台　①室内劇場(Private Theater)：シェイクスピアが座付き作者であった宮内大臣一座はジェイムズ時代に国王劇団となり、宮廷との関わりを深めていった。一座は屋外劇場グローブ座を本拠としていたが、1610 年代からは室内劇場ブラックフライアーズ座が主劇場となった。室内劇場は富裕層の観客を集め、劇中劇を含み、衣装･舞台効果に金をかけた芝居の上演が可能になった。戯曲本文の他、劇団関係記録から、室内劇場での衣装･演出の特徴を検証した。

②屋外劇場 (Public Theater)：エリザベス時代には人気を集めた屋外劇場は､1600 年代以降は､集客数で室内劇場に遅れをとるようになった。観客の多くは労働者、市民層で、剣劇や悪魔の登場などアクションを楽しむ舞台であった。戯曲本文や劇団記録から演出･衣装の特徴をまとめ、室内劇場の演目との相違を具現化した。

上記のような方法によって、A.王室演劇舞台、B.民間演劇舞台の舞台衣装・演出を再現し、劇場形態による演出・衣装の相違が次第に広がったこと、演劇舞台を取り巻く状況が内戦へ向かう時代を映していたことを照射した。

４．研究成果

(1)主な成果

①宮廷マスク(仮装仮面劇)の衣装調達について：ジェイムズ代では、饗宴シーズンに宮廷で上演される劇やマスクの数はエリザベス時代の3～4倍に上った。王妃や王子、貴族がマスク演者となり、贅を尽くした舞台・衣装が用意された。エリザベス時代末の1600年に作成されたロンドン塔衣装庫在庫目録には女王の衣類と布地1128点、同年作成のブラックフライアーズ衣装庫目録には同233点が記載されていたが、これらはすべて、ジェイムズ代にマスク衣装に作り替えられたとみられる。

宮廷マスク衣装の一部は俳優への祝儀や払い下げの形で劇団へ流れ、商業劇場で使用された。饗宴衣装が民間へ流出するまでの過程で、どのような作り替えを経たかを検証し、最終的に商業劇場の舞台で俳優がどのような衣装、演出で劇を演じていたかを視覚的に明らかにした。

マスクや劇公演が催された宮殿大ホール、有力商業ギルドが所有した建物内のホールで、現存するものからは、当時の上演規模や舞台構成を推測できる。このような場での舞台演出が民間劇場での演出に影響を与えたと考えられる。

②商業劇団経営と舞台演出について：シェイクスピアが座付き作者であった宮内大臣一座は、ジェイムズ代に国王一座となった。俳優たちは、市井の劇場で芝居を上演するほか、宮廷に召されて御前公演も行った。同一劇団が商業演劇と宮廷演劇に同時的に関与したことは、双方の演劇舞台での演出に必然的に共通性を生じさせた。宮廷マスクと商業演劇は、特に舞台衣装や装飾小道具でかなりの共通性を持っていたといえる。

劇団は宮廷での演出や衣装を商業劇場に持ち帰り、特に富裕層が集まる室内劇場で、劇中劇を含み、衣装・舞台効果に金をかけた劇公演を行った。王室とのつながりや市井での演劇人気によって経営状態が向上したこと、劇作家にとって作劇の自由度が増したことが、豪華な舞台演出を可能にした。死者や亡霊などの特殊な役柄、魔女や妖精、女神など異界の登場人物が宮廷饗宴で、また民間劇場でどのように表現されていたのか、劇作品、劇場関係史料、宮廷マスクデザイン画に拠って検証し、その造型を明らかにした。

③新たなレパートリーについて：ジェイムズ朝では、国王による認可によって騎士や貴族の位を金で買うことが可能となり、成り上がり者が首都ロンドンに目立つようになった。このような社会風潮を反映し、17 世紀初頭以降には、にわか仕立てで都会の洒落者を気取る成り上がり、いわば都市型道化が舞台に登場した。上辺を飾って競い合う皮相な風潮は、王侯貴族社会、市民社会に浸透し、「都市型道化」はそのような社会を照射するものであった。

劇団はまた、宮廷社会の内幕、王室誹謗や近親相姦などを主題とする芝居を上演するようにもなった。人気を集めたこれらの芝居は、宮廷の腐敗に対する市民の批判精神を醸成し、清教徒革命の底流を形作る要因となった。

(2)得られた成果の国内外におけるインパクト

本研究は、舞台衣装を通して、王室と民間の舞台演出、双方の劇場舞台をつなぐ劇団の活動を歴史的に解明しようとするもので、国内・国外ともで詳細な研究が行われてこなかった分野である。商業劇場における新たなタイプの道化の出現、特殊衣装の具体像、室内劇場への宮廷マスク演出・衣装の導入など、本研究で明らかになった点は多い。研究成果については論文の他、国際学会で発表を行い、Renaissance Society of America (**アメリカ・ルネサンス学会)よりシェイクスピア劇衣装に関する研究書** *Shakespeare and Costume* **の書評執筆依頼があり、学会誌に掲載（**2016 **年）された。このことは、**本研究の独自性と意義を示すものといえる。

(3)今後の展望

本研究とこれまでの研究―チューダー朝期からスチュアート朝演劇の舞台衣装と演出の可視化復元―を引き継ぎ、今後は、特にチャールズ時代末までの舞台演出の実態解明を目指す。

英国史上初めての共和制が出現するまで、商業演劇は隆盛から停止へと短期間で激変した。ジェイムズ王家は演劇を愛好し、宮廷マスク上演も盛んになったが、その巨額の経費は王室財政を圧迫した。これは、国王による爵位売買認可につながり、私腹を肥やす貴族の腐敗も横行した。一方、市井では経済が活況を呈し、商人階級の興隆が封建的身分制度を揺るがしつつあった。室内劇場では宮廷貴族の陰謀や不義、成り上がり者への皮肉や嘲笑などをテーマとする芝居が演じられ、王室の威信低下、貴族への反発を市民富裕層の間に波及させることに寄与したともいえる。チャールズ代には内戦が勃発し、1642 年にはロンドンの全ての劇場が閉鎖され、ルネサンス演

劇は終焉を迎えた。ここに至るまで、劇団の演劇活動は、急激な社会変化にどのように関わっていたのか、演劇が社会に与えた影響を歴史的に解明していく。
演劇の果たした役割を社会相の変化のなかで具現的に提示することにより、従来、分断的に行われてきた演劇研究、社会史研究を有機的に結びつけ、それぞれの分野の研究の深化、発展に貢献できると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 Yuko Kobayashi	４．巻 Vol.8, No.6
２．論文標題 Enter a City Gallant—Clowns in the Jacobean Theater	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Journal of Literature and Art Studies	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17265/2159-5836/2018.06.006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Kobayashi	４．巻 -
２．論文標題 Foreigners, Witches, and Masking Characters on the Early Modern English Stage	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Proceedings of the 28th International Costume Congress	６．最初と最後の頁 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林酉子	４．巻 18　No.1
２．論文標題 ジェイムズ朝における「都市型道化」の誕生	５．発行年 2018年
３．雑誌名 服飾文化学会誌	６．最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林酉子	４．巻 50
２．論文標題 チューダー朝における宮廷饗宴衣装の作り替え	５．発行年 2016年
３．雑誌名 国際服飾学会誌	６．最初と最後の頁 16-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuko Kobayashi	4．巻 50
2．論文標題 Translation of Masking Costumes for the Tudor Court Revels	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Journal of the International Association of Costume	6．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林酉子	4．巻 55
2．論文標題 空想上の人物造型と衣装　ー英国スチュアート朝における舞台演出ー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際服飾学会誌	6．最初と最後の頁 4－21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuko Kobayashi	4．巻 55
2．論文標題 Production of Fantastical Characters on the Early Stuart Stage	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of the International Association of Costume	6．最初と最後の頁 22－33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Yuko Kobayashi
2．発表標題 Foreigners, Witches, and Masking Characters on the Early Modern English Stage
3．学会等名 The 28th International Costume Congress（国際学会）
4．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

RIDAI（東京理科大学研究者情報データベース） https://ridai.admin.tus.ac.jp

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考